高木泰典先生のご定年退職によせて

桝　岡　源一郎

長らく本学商経学部で会計学の教鞭を執られてきた高木泰典先生が、本年三月末をもって定年を迎えられ退職された。本誌本号は、この三月末をもって退職された先生方の「退職記念号」であるので、この機会に高木泰典先生についてご紹介かたがたその人となりなどにふれ、もって高木先生への献辞としたい。

まず高木泰典先生の略歴を紹介する。先生は、昭和36年３月に中央大学商学部をご卒業後、明治大学大学院商学研究科修士課程・同博士課程を修了され、昭和46年に高千穂商科大学（現 高千穂大学）にて大学教員としての最初の一歩をしるされた。その後、昭和48年4月に千葉商科大学に助教授として着任され、昭和52年に教授になられ本年3月まで34年の長きに渡ってご自身の研究また本学学生の教育に邁進されてきた。

この間、学部においては、会計学の根幹たる「会計学総論」・「財務諸表論」をまた大学院では「会計学原理」・「同演習」を担当され、学部・大学院において多くの有為なる学生を育ててこられた。

また、日頃の研究教育活動の傍ら、平成元年４月から平成３年３月まで学生部長、平成６年４月から平成８年３月まで商学科長そしてまた平成16年４月から平成18年３月まで大学院商学研究科長として、それぞれ行政手腕を見事に発揮され千葉商科大学の発展に多大な貢献をなされた。

つぎに研究面では、「財務会計論」、「日本動態論形成史」など単著・共著併せて30冊また学術論文は「ドイツ貸借対照表論素描」、「日本動態会計論形成史の研究」など34本を数え、その他ミューラーの「国際会計論」の翻訳（一部）など数多くの業績残され、学会ではドイツ及びわが国の貸借対照表論の研究者として知られている。

先生の研究のご関心は、前半はドイツ貸借対照表論の学説史研究を中心とされ、また後半はドイツおよびアメリカの会計学から多くを学びわが国の会計理論を形成していった過程を中心にされている。とくに後半は、これまで等閑視されてきたと言っても過言でないわが国の会計史ないし会計学説史に焦点を当てて研究されている。それは、会計理論の基本である静態論と動態論を中心置いて、後者が前者を凌駕していくプロセスを学説別に研究され、わが国において動態論が主役の座を占めるに至るプロセスを緻密に研究されている。

学説史研究という非常に細かなまた膨大な資料を精読し纏めあげる実に根気のいる研究をコツコツと長らく成し遂げられてきた甲斐あって、前述の論文「日本動態会計論形成史の研究」によって明治大学から『博士』（経営学）の学位を平成16年に取得された。実に高木先生の集大成と言えるものであろう。

最後に高木先生の人となりなどについてふれてみたい。先生のお人柄を一言で表現すれば、実に温厚な人となりであると言うことができよう。これまで高木先生が言を荒げて大声あげられたところを私は一度も見たことがない。正直に言うと一度だけ私の責で先生に叱られたことがある。それは皆が賛成することに対して私だけが反対したことによるもの

であったので叱られても仕方がないことであった。しかし、それもほんの一瞬、すぐに先生はいつもの穏和な表情に戻って私を説得しようとされ、結局私は先生の説得に負けてしまい賛成にまわったのであった。それも１年ほど前のことである。ことほど左様に高木先生は温厚な方である。

また高木先生は、実に後輩思いの方でもあった。実は私にとって先生は同門の大先輩にあたる。これはまったくの偶然で、このような関係にあることは本学に奉職して初めて知った。それ以来ことあるごとに先生は私にアドバイスをして下さった。何かあるたびにわざわざ私の研究室をノックして言葉をかけて下さった。この高木先生の優しさは、われわれ商大の会計グループの者皆等しく感じていると思う。心から感謝申し上げる。

さて、高木先生は本年３月末をもって本学をご定年退職されたのであるが、これからも先生にはまだまだ非常勤として本学にお見え願うことになっている。先生にはお身体に十分ご注意を頂き、今後とも一層我々後輩のご指導を願い上げる次第である。